

## ムハンマド・エミン・ボグラに関する一考察

—— その思想形成の背景と著作『東トルキスタン史』を中心に ——

清水 由里子

## はじめに

20世紀前半期には、新疆におけるウイグル人<sup>(1)</sup>のナショナリズムの高揚とともに、ウイグル人自身の手によって数々の著作や定期刊行物が出版された。そのうちのもっとも重要な著作のひとつが、1930・40年代の民族運動において指導的な役割を果たしたムハンマド・エミン・ボグラ Muḥammad Āmīn Bughra の『東トルキスタン史』 *Sharqī Tūrkiṣtān Tārīkhī* である。ボグラの活動の軌跡とその著作『東トルキスタン史』については、新免康の論考や、筆者および新免康と鈴木健太郎との共同著作、水谷尚子の調査報告（新免 1990、1994、2001、清水・新免・鈴木 2007、水谷 2008）などによって徐々に研究が進展しつつあるものの、未解明の部分も少なからず残されている。そこで本稿では、筆者が 2007 年 7 月と 2008 年 9 月の 2 度にわたって実施した、トルコ共和国・イズミルにおける調査<sup>(2)</sup>によって得た資料や口述証言をベースとして、ボグラの思想形成の背景やその精神が反映された『東トルキスタン史』について新たに知りえたことを記すとともに、若干の考察を加えたい。ただし、本稿はあくまでも試論としての域を出るものではなく、提示するデータも今後、他資料との比較・対照において検討を要するものであることをあらかじめお断りしておく。

<sup>(1)</sup> 本稿では、便宜上、現在のウイグル人にあたる民族集団を時代をさかのぼってウイグル人と呼ぶ。ただし、ムハンマド・エミン・ボグラは一貫して自らを「テュルク」と称していたことをつけ加えたい。

<sup>(2)</sup> 筆者は、NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点・研究グループ 1「中央ユーラシアのイスラームと政治」において、新免康と共同で研究を行っている「ウイグル人ナショナリストの思想と活動に関する総合的研究」の活動の一環として、トルコ共和国・イズミルで 2 度の調査を実施した。2007 年の調査の報告は <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centralearasia/report/2007/shimizu/index.htm>（2007 年 10 月 11 日に掲載）、2008 年の調査の報告は <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/centralearasia/report/2008/shimizu/index.htm>（2008 年 10 月 9 日に掲載）を参照されたい。

## 1. ムハンマド・エミン・ボグラの思想形成の背景について

同時代を生きたハージー・ヤークーブによって、「過去 100 年のあいだに、東トルキスタンには、希有な指導者であり、テュルク主義者かつ民族主義者、独立主義者、学者、知識人、文学者、詩人であるひとりの人物を生み出した。その人こそ、故ムハンマド・エミン・ボグラ氏である」<sup>(3)</sup>と評されているように、ムハンマド・エミン・ボグラ（以下、ボグラとのみ記す部分もある）は20世紀のウイグル人を代表する傑出した政治的指導者であるとともに、著述家としても知られている。事実、ボグラはその生涯において精力的に執筆活動にとりくみ、『東トルキスタン史』をはじめとする著作のほか、自らの主催する出版社から数多くの新聞や雑誌を発行してきた。しかし、ボグラの執筆活動の主眼は、「祖国」東トルキスタンの解放を目的として、現状における諸問題を人々に周知させることに置かれ、彼が自らについて語ることはほとんどなかった。そのため、ボグラの思想や意識面、とくにナショナリストとしての思想形成と内面的変化については依然考究すべき課題として残されている。そこで本章では、ボグラの手による略歴「ムハンマド・エミン・ベグの略歴」Muhammad Āmīn Begning Qisqicha Tarjimiḥālī<sup>(4)</sup>と、青年期から1949年までの自身の政治的な活動を記した未発表の半生記「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」Muhammad Āmīn Bughraning Siyāsī Hayāti<sup>(5)</sup>、そしてボグラをもっともよく知る近親者である娘のファーティマ Faṭīma と娘婿の

<sup>(3)</sup>Hacı Yakup Anat 2005: 67. ハージー・ヤークーブはブルサ（トルコ）生まれのウイグル人で、新疆や中国内地で出版活動に携わった。1947 年からは、ボグラやアルプテキンの要請に従ってウルムチに赴き、『エルク』 *Erk* 紙の出版やアルタイ出版社の諸活動において活躍した（Hacı Yakup Anat 2003）。

<sup>(4)</sup>ユーヌス（後述）によれば、略歴の正確な執筆年代は不明であるものの、紙の質や内容から鑑みて、1943 年頃に重慶で書かれた可能性が高いとする。全部で4 頁（2 頁目は欠落）というきわめて短い文章ながらも、ボグラ自身によって記されたものであることから、「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」同様、ボグラのライフ・ヒストリーに関わる一次史料としては他に類をみないものであると言えよう。現在はいずれもユーヌスが所蔵している。

<sup>(5)</sup>ユーヌスによれば、この半生記はボグラが1949 年に2 度目の国外脱出を行い、カシュミールのスリナガルに滞在していたとき、デリーの『タイムズ・オブ・インディア』 *Times of India* 紙のスリナガル特派員、シリ・シンハ Shiri Shinha の取材を受け、その要請に従って、1950 年に執筆したものであるという。東トルコ語で書かれた44 頁におよぶ草稿の大半は、1940 年代の中国内地およびウルムチにおける活動の記録で占められており、とくに12 頁からはじまる「チーンにおける私の2 度目の活動」と題する章では、ボグラがテュルク民族の自治の獲得を目的として行った出版・宣伝活動や、国民党議会における活動などが詳細に記されている。しかし脱稿後、自らの活動を称揚し、マスウードやブルハンなどの同胞を批判する文章を発表することを潔しとしなかったボグラが掲載を見送ることを決めたため、生前はついに世に出ることはなかった。なお、水谷報告で活用されている *Siyasiy Hayatim*（水谷 2008: 32）は、ユーヌスの実弟ムハンマド・ヤークーブによる現代ウイグル語訳である。

ユーヌス Yūnus<sup>(6)</sup>の口述証言を手がかりとして、ボグラの思想形成の背景にある家庭環境や、青年期およびカブル滞在期における人的交流について考察を加えたい。

### ①家庭背景

まず、ホータン革命にいたるまでのボグラの経歴を簡単に述べたい。ムハンマド・エミン・ボグラは1900年にイルチ Ilchi、すなわち現在のホータン市で誕生した<sup>(7)</sup>。父方はウラマーの家系であり、母方は医者の家系であった。ホータンの著名なムダッリスのひとりであった父ファリードウッディーン Farīd al-Dīn は、ボグラが6歳の時、彼を自身の家のマクタブ<sup>(8)</sup>に入れた。9歳の時にこのマクタブを卒業したボグラは、ファリードウッディーンが管轄するキコ Qiqo のマドラサに入学したものの、その2年後にファリードウッディーンが死去したことから、ホータン市内のハーンリク Khānliq・マドラサという名の上級マドラサに入学した。しかし、当時カラカシュ Qaraqash 市にあったオイバグ Oybāgh・マドラサがホータン随一のマドラサであると考えた母サキーナ Sakīna は、ボグラをオイバグ・マドラサに移した。ボグラはここでアラビア語やペルシア語、文学を学ぶかわら、当時ホータンを訪れたイスマーイール・ハッキー Ismā'īl Ḥaqqī という名の一人のトルコ人によって最新の知識を学んだという。1922年にマドラサを卒業したボグラは、ホータン市内のアフマド・シャイフ Aḥmad Shaikh・マドラサでムダッリスとなり、学生への指導にあたった。2年後、このマドラサを離れてカラカシュ市に赴き、マドラサでムダッリスを務めることとなった<sup>(9)</sup>。その後、1930年に新疆各地を周遊する旅行に出て、帰郷した後、革命に着手することとなる。

ここで、ボグラの家庭背景についてもう少し詳しく紹介しておこう<sup>(10)</sup>。ボグラの父ファリードウッディーンはホータン市付近に位置するユルンカシュ Yurungqash の出身で、ユルンカシュ付近のキコのマドラサでムダッリスを務めていた。母サキーナはホータン市の名家

<sup>(6)</sup> ファーティマとユーヌスの経歴については、水谷 2008: 30-32 を参照されたい。

<sup>(7)</sup> Bughra 1943?: 1. 本段落のボグラの経歴に関する記述は、とくに注がない限りは略歴に従う。略歴の内容には他資料との齟齬が見られるものの、この略歴がボグラの筆によるものである以上、現在参照できる資料のなかではもっとも信憑性が高いものであると考えられる。

<sup>(8)</sup> ファーティマによれば、これはハリーファリク・ホイラに隣接するアルトゥン Altun・マドラサのことであるという。

<sup>(9)</sup> イェンギ Yengi・マドラサを指す。ファーティマによれば、ボグラがイェンギ・マドラサでムダッリスをしていたとき、カラカシュ人のトフタハーン Tokhtakhān と一度目の結婚をする。しかしその数年後、ボグラの末弟ヌール・アフマドを養育した伯父アリーが逝去した際、ボグラは叔父の恩義に報いるため、残された娘アミーナ Amīna を第二夫人として迎えた。当時、身重だったトフタハーンはこのことが原因でボグラと別れたものの、誕生した娘ファーティマはボグラの唯一の子供として以後も密接な関係を保ち、革命前はカラカシュとホータン市を行き来する生活をしていたという。

<sup>(10)</sup> ボグラの家庭背景の情報は、ユーヌスとファーティマの口述証言に基づくものである。

の出身であり、彼女の一族とともにホータン市内にあるハリーファリク・ホイラ Khalīfalik Hoyla とよばれるマハッラに居住していた<sup>(11)</sup>。ボグラは二人の長男（第二子）として、このハリーファリク・ホイラで誕生した。二人のあいだの子供は四男二女であり、上からマフフーザ Mahfūza、エミン（ボグラ） Āmīn、マリアム Maryam、ムハンマド・シャリーフ Muḥammad Sharīf、アブドゥッラー ‘Abd-allāh、ヌール・アフマド Nūr Aḥmad であった<sup>(12)</sup>。非常に宗教熱心な人物として知られたファリードゥディーンは生涯に7度のメッカ巡礼を敢行し、最後の巡礼の帰路で他界した。父に代わってボグラとその兄弟たちを育てあげたのは、教育熱心な母サキーナであり、伯父ムハンマド・ニヤーズ Muḥammad Niyāz やアリー ‘Alīをはじめとするサキーナの生家の一族であったという。後年ボグラは「宗教に傾倒してほとんど家庭を顧みなかった父ではなく、今の自分があるのはひとえに母サキーナのおかげであった」と述懐していたといわれるが、このような幼少年期における父の不在と母方の存在感の大きさは、父と同じムダッリスの職を選びながらも、その後は、保守的なウラマーであった父とはまったく異なる道を歩んだボグラの経歴を考えるうえで、非常に興味深い。

## ②青年期

ホータンという新疆のなかでもとくに保守的な土地<sup>(13)</sup>に生まれ育ち、30歳になるまで故郷を出ることのなかった青年期のボグラが、いかにして近代的な思想に目覚め、革命を志すにいたったかということは、その後のボグラのナショナリストとしてのあり方を考えるうえ

<sup>(11)</sup> サキーナの父はハーキム・シャー Hākim Shāh、母はジャミーラ Jamīla。二人のあいだの子供は四男四女で、上からムハンマド・ニヤーズ Muḥammad Niyāz、ムハンマド・シッディーク Muḥammad Šiddīq、アリー ‘Alī、ユースフ Yūsuf、サキーナ Sakīna、サリーマ Salīma、サイード Sa‘īda、サラ Sārā。ファータィマによれば、西トルキスタンからの移住者であったハーキム・シャーが在地の豪族の娘ジャミーラと結婚した後、一族のマハッラとしてハリーファリク・ホイラを作ったという。ムハンマド・ヤークーブ（ユヌスの実弟）は、自身の幼少時の見聞を根拠として、サキーナが19世紀におけるホータン反乱の指導者アブドゥラフマンのひ孫であったとしている（Bughra 1998: XXI）。ファータィマはこれに対しては否定的で、少なくともボグラ自身の口からこのことを聞いたことはないと言断する。ボグラにとってこのことが意味を持つ事実であったかどうかはともかく、当時のホータンの人々の間に、ボグラは血縁として19世紀後半のムスリム反乱の指導者と母方からつながりがあるという認識が存在していたとするならば、政治指導者としての資質に関する人々の感覚・意識を示す点において興味深い。

<sup>(12)</sup> 息子たちの名前は Bughra 1971: 193 でも確認できる。このうち、姉マフフーザと次弟ムハンマド・シャリーフは早逝し、アブドゥッラーとヌール・アフマドは革命のさなかの1934年に戦死した。マリアムはひとりホータンに残り、1990年に没したという。

<sup>(13)</sup> 1930年代の後半にホータン地区の視察を行ったホータン教育局の馬銳は、ホータンに関して「南新疆のなかでも、とくにホータンは宗教勢力が依然力を持っており、極端に濃厚な封建的意識が人々の思想を支配している」とのコメントを残している（政1-2-056: 11）。

できわめて重要な問題である。ボグラの思想は同時代を生きたその周辺人物たちとの人脈関係の中で形成されたものであったと想像されるが、ボグラの思想形成に影響を与えた人物として、まず第一に注目されるのは、その伯父ムハンマド・ニヤーズである。

ハリーファリク・ホイラに大きな病院を構えていたムハンマド・ニヤーズは、当時の新疆では名の通った医者であったといわれ、彼のもとには薬商人をはじめとするさまざまな商人が出入りしていた<sup>(14)</sup>。これらの商人が、先進的なムスリム地域である西トルキスタンをはじめとする各地から、文化・宗教・政治状況の見聞や出版物、新聞、書物などをもたらすことにより、ムハンマド・ニヤーズの家はホータンにおける知的交流の中心地となっていた。当時オイバグ・マドラサで学んでいたボグラも、週末毎にハリーファリク・ホイラに戻って来ては、伯父の「サロン」で情報収集を行っていたという。また、当時、カシュガルやホータンのみならず、新疆から巡礼に行く際には、必ず北インドのデーオバンドDeobandを経由していたという情報も特筆に値する。デーオバンドはイスラーム宗教指導者によるインド民族運動指導の中心として知られており、その思想は彼の地に立ち寄った巡礼者や、彼らが持ち帰った新聞や雑誌によって、ホータンにも流入していたという。ムハンマド・ニヤーズ自身、何度もメッカへの巡礼を敢行しており、デーオバンドの情報がボグラに直接的に伝わっていたであろうことは想像に難くない。ボグラはその半生記「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」において、自らの政治人生の出発点を、「私が中等教育を受けていたときに（第1次世界大戦が始まったとき）、東トルキスタンに国外からの新聞や雑誌、また旅人たちがやって来るようになった。私はこれらの新聞や雑誌を熱心に読んだ。また伯父を訪ねてきた旅人たちが伯父と交わす話に夢中で聞き入った」（Bughra 1950: 1）と記している。このことから明らかに、父親代わりの伯父が開催する「サロン」において、外国からのさまざまな情報に触れえたことが、ボグラの思想形成の原点になったと考えることができる。

第二に、ボグラに新式教育の洗礼を授けた人物として、トルコ人教師であるイスマエール・ハッキーの存在を無視することはできない。ボグラは半生記のなかで、上述の伯父のエピソードに続いて、「1913年にホータンに来たある外国の教師であった旅人から個人的に授業を受け、最新の教育と政治的な研究についていくばくかの知識を得た」<sup>(15)</sup>と記しており、ここでは名前は伏せられているものの、本章①の経歴で示したとおり、略歴にはその人物がイスマエール・ハッキーであったことが明記されている。ボグラと新式教育とのかかわり

<sup>(14)</sup> ムハンマド・ニヤーズの記述は全面的にユヌスの口述によった。なお、ムハンマド・ニヤーズはユヌスの父方の祖父にあたる。彼については水谷 2008:33 でも言及されている。

<sup>(15)</sup> Bughra 1950: 1. 民国時代のホータンの教育について記した Jappar Āmāt は、ボグラが、イスマエール・ハッキーたちが 1920 年にホータン市のアルトゥンルク・マドラサで開設した新式学校の最初の学生であったとする（Jappar 1986: 36-37）。しかし、ファーティマによれば、ハリー

はすでに新免によって指摘されているものの(新免 1998: 18)、ボグラがイスマール・ハッキー個人からどのような授業を受け、そこから何を得たのかということについては、上記以上の具体的な言及はないため、必ずしも明らかではない。ただし、ボグラが『東トルキスタン史』のなかで、1910年代にトルコから新疆に来て、新式教育の普及に努めたアフマド・カマル(アフメト・ケマル)やイスマール・ハッキーに関して、彼らとの交流を通じて、「きわめて初歩的で不完全ではあったものの、多くの人との意識の中にわずかな覚醒と[主体的な]思考の活動が生じた。各地では、科学的・社会的な方法に関する議論がなされるようになった」(Bughra 1940: 583, 1971: 10)と評していることから類推すれば、イスマール・ハッキーから直接薫陶を受けたボグラにも「民族覚醒」<sup>(16)</sup>のきざしが生じたと考えることも、あながち的外れではないであろう。

第三に、ボグラの革命遂行への決意を後押しした人物として、タタール人のムラード・ラムズィ Murād Ramzī の名前を挙げたい。前述のように、ボグラは1930年から新疆各地を周遊する旅に出ており、ボグラはこの半年にわたる新疆各地を周遊する旅の果てに、東トルキスタンを解放するには武装革命の決起以外の方法はないという結論に達し、ホータンに戻った後、ただちに革命の準備に着手したといわれる<sup>(17)</sup>。ボグラから直接その話を耳にしたユースヌスによれば、この旅においてボグラに最終的に武装蜂起の決意を固めさせたのは、上述のムラード・ラムズィであったという。ムラード・ラムズィはカザンでジャディード運動にたずさわったタタール人であり、新疆に逃れてきた後はチョチェクのマドラサでムダッリスをしていた<sup>(18)</sup>。いかなる理由によってか、ムラード・ラムズィについては、『東トルキスタン史』では、「チョチェク市に在住するシャイフ、ムハンマド・ムラード・アフアンディのも

---

ファリク・ホイラに隣接するアルトゥン・マドラサは伝統的な宗教学校であったといわれ、また略歴と半生記の記載が事実ならば、ボグラがアルトゥン・マドラサに入学したのは1906年のことである。他方、イスマール・ハッキーがホータンに来たのは1913年であり、年代的にも Jappar Āmāt の記述とは矛盾が生じる。以上のことから、ボグラがイスマール・ハッキーから薫陶を受けたことは事実であるにせよ、ボグラがホータン市内のアルトゥンルク・マドラサで新式教育を受けたという記述は誤りであるといわざるをえない。

<sup>(16)</sup>『東トルキスタン史』において、イスマール・ハッキーたちの新式教育運動が記されている章のタイトルが、「東トルキスタンにおけるはじめての民族覚醒」Sharqī Türkistānda Awwal Daf'a Millī Oyghanish となっていることは注目に値する。

<sup>(17)</sup>Bughra 1940: 635, 1971: 55. ボグラがホータンで革命を決意し、サービト・ダームッラー Thābit Dāmullā という同志を得て、実際に行動を起こすまでの経緯については新免 1990: 18-22 に詳しい。

<sup>(18)</sup>ムラード・ラムズィは新疆においては開明的なウラマーとして名高く、トルファンのムヒーティ兄弟と行動をともにし、後に日本に亡命したムハンマド・イミン・イスラーミー Muḥammad Āmīn Islāmī の回想にも、アフメト・ケマルらと同時期に新式教育の普及に努めた「タタールの同胞」としてムラード・ハズラット・ラムズィの名前が見いだせる (Muḥammad Āmīn Islāmī 1941: 4)。

とに赴き、ハディースとタフシールを学び、[ウラマーとして] より高い地位を得るために「チョチュクに行く」という口実を思いついて準備に取りかかった、と述べられるにとどまり (Bughra 1940: 635, 1971: 54)、実際の会見については何も触れられていない。ただし、ボグラの革命の同志にして、後にカシュミールの東トルキスタン民族統一協会 *Sharqī Türkistān Millī Birlik Jam'īati* の会長を務めたムハンマド・カースィム *Muhammad Qāsim* が、ボグラが「著名なウラマーであり、ムジュタヒドであるムラード・アフアンディ」のもとに赴き、数ヶ月間のあいだ意見交換を行い、そこから多くのものを得て、まったき知識を身につけてカラカシュに戻ってきたと述べていること<sup>(19)</sup>、また『東トルキスタン史』の参考文献に、『情報集』*Talḥīq al-Ākhhbār*<sup>(20)</sup> という名のムラード・ラムズィの著作が掲げられていることなどは、ボグラがムラード・ラムズィによって革命へと邁進する見解に導かれたというユヌスの証言の裏付けになりうると考えられる。

以上述べてきたような青年期のボグラの内的変化に関しては、上記の周辺人物の来歴や思想的傾向の分析も含めたより詳細な検討が必要であるものの、ボグラの思想形成の各段階において、周辺人物によって直接的あるいは間接的にもたらされる外国の知識や思想の影響が、その方向性を決定する重要な要素となっていたことを指摘したい。

### ③カーブル滞在期

さて、1931年に始まった革命が失敗に終わった後、ボグラは中国国外に逃れ、1934年9月から1942年3月までの一時期をカーブルで過ごした (Bughra 1950: 7-9)。カーブル滞在中には、ボグラはカーブルでは一切の政治活動を行わないという言質をアフガニスタン政府に与えるなど<sup>(21)</sup>、一定の政治的な活動の制約は受けていたにせよ、アフガニスタン政府の「非公式の客人」として厚遇され、比較的安定した生活を送っていたようである<sup>(22)</sup>。そうした状況のなかで、ボグラは主として世界の政治、諸民族の政治・社会情勢の研究に従事して

<sup>(19)</sup> Bughra 1971: 195-196. カラカシュ出身のムハンマド・カースィムは、ホータン革命に途中から参加し、イスラーム政府では国庫の管理を行った。革命の失敗後はボグラとともにアフガニスタンに逃れ、カシュミールで設立された東トルキスタン民族統一協会の会長を務めた (*Muhammad Qāsim* 1981: 3-5)。ボグラから『東トルキスタン史』出版を任されたのもこのムハンマド・カースィムであり、ユヌスによれば、ボグラとは非常に近い関係にあった人物であるという。

<sup>(20)</sup> Bughra 1971: 6. 著作の説明には「テュルクとタタールの歴史」とある。Bughra 1987: XXX には1908年にオレンブルクで出版されたとある。

<sup>(21)</sup> Bughra 1950: 7-8. ボグラはカーブルでは自らの出自や経歴を隠し、偽名を用い、表向きはヤルカンドのウイグル人商人として店舗を営んでいたという。

<sup>(22)</sup> 水谷はボグラのカーブル滞在中の暮らし向きについて、困窮していたとするユヌスの証言に疑問を呈しているが (水谷 2008: 34)、筆者のインタビュー時には、ユヌスは、アフガ

いたという (Bughra 1950: 9)。この時期はボグラの代表作である『東トルキスタン史』の執筆がなされたことに加え、それ以前の武装蜂起・革命から、それ以後の中国政府内部における自治獲得のための活動への移行など、ボグラの実践的な活動の重要な転換期にあたる。この時期に関して、ボグラは「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」のなかで、「世界の政治や諸民族の政治的・地理的・社会的・経済的状況と、我が郷土の政治的・地理的状況および、我が民族の社会的・学術的・経済的状況とを比較して、我が郷土の将来をよい結末に導くために、私自身が[それに]ふさわしい方針を決するために努力した」(Bughra 1950: 8)と述べており、またその結果として、「私は中国政府と話し合う決心をした」(Bughra 1950: 9)と記していることから、新疆では知りえなかった大量の新しい知識や情報に接したカーブル滞在期は、ボグラの思想や意識面という点においても重要な変革期となったと見なすことができるであろう。残念ながら、カーブル時代については他の資料が存在せず、具体的な検証を行うことができないため、以下ではユーススの口述証言から得られたいくつかの重要と思われることがらについて記したい。

カーブル滞在時、ボグラは各国の大使と盛んに交流を行った。ボグラはテュルク語に加え、ペルシア語、アラビア語にも堪能であったことから、トルコやエジプトをはじめとするムスリム諸国の大使との直接対話により親交を深めていたという。なかでもカーブル駐在トルコ共和国大使<sup>(23)</sup>とは非常に関係が深く、当時ヤルカンド商人アブドゥッラー・ハーン・ヤルカンディー ‘Abd-allāh Khān Yārkandīとして活動していたボグラの本来の素性も知っていたという。『東トルキスタン史』の参考文献のうち、とくにテュルクの古代史に関する記述は、トルコ大使が寄贈した多くのトルコ語の歴史書がその参考とされた<sup>(24)</sup>。ボグラが汎トルコ主義者ではなかったことは、『東トルキスタンのテュルク』としての自民族のあり方を鮮明に打ち出した『東トルキスタン史』から明らかであるが<sup>(25)</sup>、カーブル滞在期に、テュ

ニスタン政府は表面的には「ホータン・アミールであるボグラ」には不干渉の立場をとっていたものの、実際には様々な局面で援助を与えており、毎月 300 アフガン・ルピーをボグラに支給していたと証言している。同時期にカシュミールにいたムハンマド・カースィムも、アフガニスタン政府はボグラに「十分な月給と敬意」を払っていたと記しており (Bughra 1971: 198)、ボグラ自身、アフガニスタン政府が「アフガニスタンで、安全で快適に過ごすことに十分な援助を与えると約束した」、あるいは「カーブルにおける 7 年半の滞在期間に困ることなく暮らした」(Bughra 1950: 8)と述べていることから、カーブルではある程度の政治的自由が保障され、経済的にも比較的安定した生活を送っていたと考えるのが妥当であろう。

<sup>(23)</sup> ユーススによれば、メモドゥフ・シェヴケック・エセンダール Memduh Şevkek Esendal という名の人物だったという。現時点ではまだ特定はできていない。

<sup>(24)</sup> 水谷 2008: 38. そのうちの一冊である『テュルクの故地』 *Türk Ana Yurdu* については、後年この著作を読んだユーススが、『東トルキスタン史』がこの本から多大な影響を受けているという印象を受けたとコメントしている。書籍の特定はできていない。

<sup>(25)</sup> このことに関してユーススは、汎トルコ主義をめぐってボグラはバシキール民族運動の指導

ルクの同胞とみなされた、より「先進的」なトルコ人から受けた影響もまた少なからぬものであったと推測される<sup>(26)</sup>。

また、カーブル滞在期に、ボグラがアフガーニー Jamāl al-Dīn al-Afghānī とムハンマド・アブドゥフ Muḥammad Abduh の著作を熱心に読んでいたとするユーススの証言も興味深い。ボグラは敬虔なムスリムであり、自身は1日5度の礼拝や断食を怠ることはなかった。しかし、信仰は個人の内面的な問題としてとらえ、けっして他者に強要するようなことはなかったという。ユーススによれば、ボグラのこうしたムスリムとしてのあり方は、カーブル滞在中に読んだ上述のようなイスラーム改革思想家の影響によるところが大きく、ボグラ自身、カーブル滞在を境として自らに顕著な内面的変化があったことを認めていたという。もちろん、検討する材料が決定的に不足している現状において何かを断言するのは難しく、ここではそのような情報もあったということを指摘するにとどめたい。

当時の動向として、知識人の自己認識のあり方は、ムスリムとしての意識とテュルク民族のどちらかがより強力な軸となっているからという点において、人により二様に分かれる傾向があったと言われる。ボグラについては、宗教指導者としてイスラーム政府を樹立した青年期から、テュルク民族主義者として活動を行った壮年期にかけて、前者から後者へとやや比重が移った傾向が認められるものの、それがどのようなきっかけでどのように変化したのか、また各段階でそれぞれがどの程度の強さであったのかということはまだ明らかではない。今後は、ボグラのナショナリストとしての思想形成と内面的変化を、紙幅の関係上、本稿では触れえなかった1940年代における中国内地およびウルムチでの活動期も含めた長期のタイムスパンでとらえつつ、その複合的な自己認識に留意しながら、実証的に検討していく作業が必要であろう。

## 2. 『東トルキスタン史』について

ムハンマド・エミン・ボグラの思想や意識面について検討を加えるうえで、そのナショナリストとしての歴史観や思想が色濃く反映された著作『東トルキスタン史』は不可欠の材料である。とくに『東トルキスタン史』は、ウイグル人の手によって民族主義的立場から著述された体系的な歴史書として注目に値する存在であり、当地域の近代史を検討するための史

者トガン Togan と、論争を行ったと証言している。

<sup>(26)</sup> 1949年にボグラがウルムチで活動していた際、トルコ歴史協会 Türk Tarih Kurumun から『東トルキスタン史』をトルコ語に翻訳して出版したいとの要請が届いたこと (Hacı Yakup Anat 2005: 68)、またボグラが最終的にはトルコ共和国に亡命したことなどから鑑みて、カーブル滞在期以後も、ボグラはトルコ共和国との関係を保ち続けていたと考えられる。

料としても高い価値を具えている。『東トルキスタン史』については、筆者らはその重要部分の翻訳および訳注を提示するとともに、その特徴や史料価値についても検討を加えた(清水・新免・鈴木 2007)。しかしながら、その後の筆者のイズミルにおける調査を通じて、2007年の時点では目途の機会を得なかった『東トルキスタン史』のオリジナル・テキストや、1947年版の『東トルキスタン史』、1948年に再出版が計画されていた『東トルキスタン史』のゲラ、そして前述の未発表の半生記「ムハンマド・エミン・ボグラの政治人生」の手稿をはじめとする新たな史料を入手したことにより、さまざまな側面において再考を要する課題が生じた。そこで本章では、その手をはじめとして、まず現在までに出版されている『東トルキスタン史』の各ヴァージョンについて、とくにオリジナル・テキストとの異同に留意しながら、その書誌情報や基本構成などのデータを記し<sup>(27)</sup>、あわせて今後の研究上の課題について考えることとしたい。

#### ①『東トルキスタン史』各版の基礎データ

前述のように、1934年からカーブルに滞在していたボグラは、1940年4月18日にこの地で『東トルキスタン史』の執筆を終えた(Bughra 1940: 776)。赤い背表紙の緑色のノートに万年筆で記されたボグラ直筆のテキストは、現在はボグラの娘ファータマと娘婿ユーススによって所蔵されている。オリジナル・テキストはいわゆる東トルコ語で書かれたものであり、推薦の辞と目次を含む40頁の冒頭部と776頁の本文からなっている<sup>(28)</sup>。残念ながら、本文の3頁から50頁までは1940年代の政治的混乱のさなかで失われたものの、それ以外はほぼ完全な形で保存されており、ボグラが『東トルキスタン史』に掲載するために作成した23枚の彩色地図<sup>(29)</sup>も、テキストとともに保管されている。

1947年になって、ようやく『東トルキスタン史』の第一版が刊行された<sup>(30)</sup>。薄紫色のペーパーバックの表紙には、書名が『東トルキスタン史』*Sharqī Tūrkistān Tārikhi*、著者がムハン

<sup>(27)</sup>『東トルキスタン史』出版経緯については、すでに筆者の2007年の報告と水谷の報告(2008: 38)によってその詳細が明らかにされているため、本章ではその要点を簡潔に記すにとめたい。筆者の報告は前出のURLを参照のこと。

<sup>(28)</sup>冒頭部の推薦の辞は、アフガニスタン教育顧問イスマーイール・ヒクマト・ベグ *Ismā'īl Hikmat Beg* (元トルコ共和国公教育監査官)とカーブル師範学校教師長ミヤーン・ハサン・ハーン *Miyān Hasan Khān* からの寄稿による。また目次は第一時代、第二時代、第三時代の三部構成となっている。

<sup>(29)</sup>ボグラがオクスフォード・アトラスを元にして、オリジナルのデータを加えたものであるという。

<sup>(30)</sup>ボグラは、東トルキスタン民族統一協会は1941年から出版作業に着手したものの、「経済的理由と当時の政治情勢」によって出版が遅れ、1947年になってようやく刊行されたと述べている(Bughra 1948: a)。なお47年版の中表紙には1940年と記載されている。

マド・エミン・ベグ Muḥammad Āmin Beg、発行者がカシュミールの東トルキスタン民族統一協会 Sharqī Tūrkiṣtān Millī Birlik Jam‘iati<sup>(31)</sup>であることが記されている。監修者は同協会の会長ムハンマド・カースィム Muḥammad Qāsim であった。47年版は、オリジナル・テキストのカシュミール人の手による書写を油版印刷したものであり、総頁数は461頁で、オリジナル・テキストの本文の1頁から614頁にあたる部分が収録されている。ただし、その冒頭部と本文の最後にあたる1930年代の民族革命の部分 (Bughra 1940: 615-776) は除外され、地図も掲載されなかった。

47年版の『東トルキスタン史』の出来に非常に不満であったボグラは、『東トルキスタン史』の再出版を決意する<sup>(32)</sup>。ウルムチのアルタイ出版社で、1948年までに80頁までの草稿が準備されたが、政治状況の変化にともなう混乱によって計画は頓挫した。現在、ユーヌスの手元に残されている80頁分のゲラ<sup>(33)</sup>を実見したところ、この版のテキストは、当時アルタイ出版社で使用されていた現代ウイグル語に似た活字で組まれており、アラビア数字や英語も使用されている点で特徴的である。またその構成や内容においても、オリジナル・テキストからの大きな改編が見られることを指摘したい<sup>(34)</sup>。

ボグラの没後、1971年になって、未刊行であったオリジナル・テキストの後半部分がカシュミールで出版された。監修者は47年版と同様、ムハンマド・カースィムであり、発行のための出資者はアリー・ルーズィ・アル・ホータニー ‘Alī Rūzī al-Khtanī<sup>(35)</sup>であった (Bughra 1971: 1)。主として民族革命の部分の刊行したことにちなんで、書名は『東トルキスタン民族革命史』 *Sharqī Tūrkiṣtānning Millī Inqilāb Tārīkhi* とされた。装丁は黄色のペーパーバック

<sup>(31)</sup> ユーヌスによれば、東トルキスタン民族統一協会は1930年代の革命の後に、新疆から亡命してきたウイグル人たちによって組織された協会であり、カシュミールの町の中心にあるハージー・サライ Hājī Sarāy と呼ばれる建物に拠点を置いていた。協会の会員は150～200人程度で、彼らの主な活動は亡命者たちへの金銭的援助やビザ取得などに関わる法的手続きの補助であった。これらの資金は商人である亡命者たちのザカートに依拠していたという。

<sup>(32)</sup> この版への掲載が予定されていた「本を再出版する理由」のなかで、ボグラは47年版について、書写の誤りが多いこと、冒頭部と革命部分が除外されたこと、地図・図版が掲載されなかったこと、特定の意図に基づいていくつかの場所が改竄されていることなど、計6項目の不满を列挙している。また47年版の発行部数が300部と少ないこともその理由のひとつであった (Bughra 1948: a)。

<sup>(33)</sup> 「本を再出版する理由」と前述イスマーイーール・ヒクマト・ベグとミヤーン・ハサン・ハーインの推薦の辞を含む冒頭部として3枚、本文のテキストとして73枚のゲラが存在する。

<sup>(34)</sup> ボグラは再出版を行う際、最初の執筆時には知りえなかった情報を追加するとともに、誤りを正して、より完全な『東トルキスタン史』を出版するつもりであることを明記しており (Bughra 1948: a-b)、その方針に従って、ボグラ自身が内容に大幅な加筆・修正を加えたと考えられる。そのため、必ずしもオリジナル・テキストとは一致していないものの、本文の54頁までの内容は収録されていると考えられる。

<sup>(35)</sup> ユーヌスによれば、ホータン人であるアリー・ルーズィは、ムハンマド・カースィム同様、

で、47年版と同様、東トルコ語の書写の油版印刷であったという<sup>(36)</sup>。71年版の総頁数は208頁で、オリジナル・テキストの本文の581頁から771頁にあたる部分を収録している。ただし、革命部分の最終章である「東トルキスタンの民族革命は終結したのか、あるいは継続しているのか」(Bughra 1940: 771-776)は未収録のままになっている<sup>(37)</sup>。

1987年になって、トルコ共和国のアンカラにおいて、ファーティマを発行人として、再び『東トルキスタン史』*Sharqī Türkistān Tārīkhi*が出版された。装丁は緑色のハードカバーで、東トルコ語を活字に起こす形で印刷された。87年版は32頁の冒頭部と661頁の本文からなり、ボグラが『東トルキスタン史』のために準備した地図や図版もはじめて掲載された<sup>(38)</sup>。内容としてはオリジナル・テキストのすべてを含んでいるものの、ユーヌスが現代の読者の便宜を図るために、語彙の置き換えを行ったこと、また「故人の意思を汲んで」、自らの研究に基づいた編集を加えたことにより、本の構成やその内容という点において、ユーヌス編『東トルキスタン史』ともいべき仕上がりになっている。

1998年には、ユーヌスの実弟、ムハンマド・ヤークーブ・ボグラが、アンカラにおいて現代ウイグル語版の『東トルキスタン史』*Shārqi Türkistan Tarikhi*を出版した。装丁は青いハードカバーで、37頁の冒頭部と527頁の本文からなっている。98年版は87年版を現代ウイグル語に訳したものであり、その構成や内容は基本的には87年版を踏襲したものとなっているが、なかにはムハンマド・ヤークーブがつけ加えた新しい情報も含まれている<sup>(39)</sup>。

以上が、ボグラのオリジナル・テキストも含め、現在までに刊行された『東トルキスタン

---

ボグラとは近い関係にあり、ボグラとともに国外に逃げた後はメッカで商売を営み、財をなしていた。ボグラの生涯にわたる活動資金の大半は、このアリー・ルーギの個人的な資産からまかなわれていたという。

<sup>(36)</sup> この版のコピーストに関する情報は無い。ユーヌスによれば、71年版はボグラのオリジナル・テキストから起こしたものではなく、ムハンマド・カースィムが、47年版を出版する際に作成したオリジナル・テキストの「写本」を元にしてしていると述べている。

<sup>(37)</sup> 71年版には、革命部分以前の「東トルキスタンにおける最初の民族覚醒」から「金樹仁の統治時代」までも含まれており、この部分は47年版と重複している。このほか、本の末尾には、ボグラの詩やホータン政府のマリクこと、ムハンマド・ニヤーズ・アホン *Muhammad Niyāz Akhun* の略歴、ムハンマド・カースィムによるボグラの略歴等、本来ボグラのオリジナル・テキストにはない内容が追加されている。

<sup>(38)</sup> 87年版の冒頭部には、全体のインデックス、発行人ファーティマの言、文字対応表、ボグラの略歴、ミヤーン・ハサン・ハーンによる推薦の辞、ボグラによる序文、参考文献が含まれているほか、本文中にボグラの作成した23枚の地図と図版が挿入されている。

<sup>(39)</sup> 98年版の冒頭部には、全体のインデックス、ボグラによる序文、「本を再出版する理由」(48年版より再録)、参考文献、発行人ファーティマの言、ボグラの略歴、ボグラの刊行物一覧、ミヤーン・ハサン・ハーンの推薦の辞、イスマーイール・ヒクマト・ベグの推薦の辞、キリル文字訳者パートゥル・ラシディンの言、現代ウイグル語訳者ヤークーブ・ボグラの言が含まれている。また、87年版にはなかった注がつけられている。

史』の全容である<sup>(40)</sup>。

## ②研究上の課題

さて、筆者が『東トルキスタン史』のオリジナル・テキストと刊行されたすべての『東トルキスタン史』を実見したうえで改めて言えることは、結局現在に至るまでボグラのオリジナル・テキストに忠実に沿った形では出版が行われていないということである。本章の①で述べたように、最初に出版された1947年版では、ボグラが『東トルキスタン史』の核心と位置づけていた1930年代の民族革命の記述が除外されており、その補完のために出版された71年版においても、一部未刊行の部分が残された。加えて、47年版は東トルコ語を解さないカシュミール人が清書を行ったために書写の誤りが多く、71年版もオリジナル・テキストのいわば「写本」の「写本」であることが精確さを欠く一因となっている。これに対して、87年版は内容としてはオリジナル・テキストのすべてを含んだものであり、またボグラの作成した地図や図版も掲載されたという意味では、『東トルキスタン史』の「完成版」と考えることができるかもしれない。しかしながら、章構成の再編や語彙の置換、文章の加筆・修正といった大幅な編集が加えられたことにより、オリジナル・テキストの再現性という点では、むしろ47年版や71年版よりも低いものとなったのも事実である。87年版を現代ウイグル語に訳した98年版については言うに及ばないであろう。

こうした現状をふまえたうえで、今後の研究の展望について述べるならば、まず、ボグラのナショナリストとしての思想や歴史観を検討するうえでは、1940年当時のボグラの意向が正確に反映されたオリジナル・テキストの研究が不可欠であると言える。その意味では、筆者の調査によって『東トルキスタン史』のオリジナル・テキストの利用が可能になったことは、今後の研究の発展に少なからず寄与するものと思われる。なお、本章の①で触れた欠落部分については、不備が存在するにせよ、現在利用できるなかではもっともオリジナル・テキストに近いと考えられる47年版を参考にするのが最良であろう。

とはいえ筆者は、刊行された『東トルキスタン史』の価値と研究における意義を否定するものではない。本稿第1章の冒頭でも触れたハージー・ヤークーブは、その著書のなかで「精神的な爆弾」*manevi bomba*という表現を用いて『東トルキスタン史』が各方面に与えた影響の大きさを論じているが (Hacı Yakup Anat 2005: 67-85)、現在の新疆においても『東トルキスタン史』が第一級の「禁書」と見なされている状況を勘案すれば、ハージー・ヤークーブ

<sup>(40)</sup> 1991年にアルマトゥで『東トルキスタン史』のキリル文字転写版が出版されているが、発行人はボグラの関係者ではなく、内容も87年版の訳本であると考えられるため、本稿では取り扱わない。

の言葉も事実に基づく側面を持っているように思われる。このような、『東トルキスタン史』がウイグル人や新疆社会に与えた影響とその意義を測るうえでは、刊行された『東トルキスタン史』の研究もまた必須であると言える。

他方、ボグラの内面的変化の分析ということに関しては、48年版はその格好の材料となりうる。ボグラは48年の再出版にあたって、「新しい情報を加え、初版の不完全なところやその欠点を補えるだけ補い、可能な限り質のよい状態で再出版することを決意した」(Bughra 1948: b) と記しており、その言葉通り48年版のゲラには、40年に書き上げたオリジナル・テキストをボグラ自身が大幅に改訂したあとが見うけられる。従って、48年版とそれに対応するオリジナル・テキストとを丹念に比較・対照することで、40年代におけるボグラの内面的変化を浮き彫りにすることも可能であろう。

以上のことから、筆者は、ボグラのオリジナル・テキストの研究を目下の急務としつつも、あわせて共同研究者である新免康と進めてきた既刊行の『東トルキスタン史』各版の研究をも深化させ、それらの比較・検討において包括的な研究を進めていくことが必要であると考えている。

## むすびにかえて

本稿では、ムハンマド・エミン・ボグラの思想や意識面についての検討を通して、きわめて限定的ながらも、従来知られるところの少なかったその思想形成の背景の一端を明らかにした。またボグラの代表作である『東トルキスタン史』については、史料研究の観点から現状を明らかにし、その研究上の課題と展望を示したように思う。

最初に述べたように、20世紀前半期には、新疆におけるウイグル人のナショナリズムの高揚とともに、ウイグル人自身の手によって数々の著作や定期刊行物が出版された。それらのなかには、年代や地域は限定されているものの、ウイグル人のナショナリズムの実相を思想的背景から解明するという意味では、検討に値するいくつかの著作が存在している。今後は、ムハンマド・エミン・ボグラと『東トルキスタン史』の研究を進展させると同時に、それらの著作との比較・検討を行い、ウイグル人のナショナリズムの背景にある思想的側面に関する研究をさらに深化させることが課題であると言えよう。

## 参考文献

### 【ボグラの主要著作一覧】

\*ボグラの著作の引用は、訳注では Bughra + 年代 + 頁数の形で示した

#### 1. 未刊行テキスト

1940 “Sharqī Türkistān Tārīkhi,” Kābul, XXXX+776pp.

1943? “Muḥammad Āmīn Begning Qisqicha Tarjimiḥālī,” Zhongqing?, 4pp.

1950 “Muḥammad Āmīn Bughraning Siyāsī Ḥayāti,” Srinagar (Kashmīr), 44pp.

1948 “Sharqī Türkistān Tārīkhi,” Urumchi, VIII+73pp.

#### 2. 刊行物

1947 *Sharqī Türkistān Tārīkhi*, Kashmīr, 461pp.

1971 *Sharqī Türkistānning Millī Inqilāb Tārīkhi*, Kashmīr, 208pp.

1987 *Sharqī Türkistān Tārīkhi*, Ankara, XXXII+661pp.

1998 *Shārqi Türkistan Tarikhi*, Ankara, XXXVII+527pp.

### 【新疆政府档案】

政 1-2-056 關於喀什区文化教育中待解決的几个問題及其改進方案・視察員馬銳「南疆視察委員會文化教育組墨皮葉三渠視察報告」10-14.

### 【参考資料】

Hacı Yakup Anat (2003) *Hayatım ve Mücadelem*, Ankara: Özkan Matbaacılık, 196pp.

—— (2005) *Doğu Türkistan'da Milliyetçilik Hareketleri: Makaleler*, Ankara: Özkan Matbaacılık Gaz. San. Ve Tic. Ltd. Şti., 171pp.

Jappār Āmāt (1986) “Khotān Wilayitining Azadliqtin Ilgiriki Mādāniy-Ma’arip Tārāqqiyati Toghrisida Āslimā,” *Shinjang Tarikh Materialliri*, 20: 32-59.

Muḥammad Āmīn Islāmī (1941) *Yōqaltghān Mujāhidlarimiz*, Tokyo, 32pp.

Muḥammad Qāsīm (1981) *Nijāt Yōli*, Kashmīr, 120pp.

清水由里子・新免康・鈴木健太郎 (2007) 『ムハンマド・エミン・ボグラ著『東トルキスタン史』の研究』NIHU プログラム・イスラーム地域研究東京大学拠点、99+85pp.

新免康 (1990) 「新疆ムスリム反乱 (1931-34 年) と秘密組織」『史学雑誌』99-12: 1-42.

—— (1994) 「「辺境」の民と中国：東トルキスタンから考える」溝口雄三・浜下武志・

平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える3：周縁からの歴史』東京大学出版会、107-140.

—— (2001)「ウイグル人民族主義者エイサ・ユスプ・アルプテキンの軌跡」毛里和子編『中華世界 — アイデンティティの再編』(〈現代中国の構造変動〉第7巻)、東京大学出版会、151-178.

水谷尚子 (2008)「ムハンマド・イミン・ボグラと『東トルキスタン史』を語る：娘婿ユヌス・ボグラ、娘ファティマ・ボグラの口述」『日本中央アジア学会報』4: 29-39.

#### 【付記】

本稿は、NIHU プログラム・イスラーム地域研究による研究成果の一部である。なお、ファティマ女史とユヌス氏にはイズミルでのインタビュー調査に際して全面的にご協力いただいただけでなく、所蔵する貴重な資料の数々を惜しみなくご提供いただいた。ここに記して謝意を表したい。

(中央大学大学院博士後期課程)